

美術館講座 2025 第1回「アール・デコの誕生」(要約)

2025 年 6月14日 (土)

講師：三田村哲哉（兵庫県立大学環境人間学部教授）

三田村：本日はご来館くださりまして誠にありがとうございます。

本日の講演タイトルは「アール・デコの誕生」です。この主題は非常に大きなものであるため、前半の対象はフランスにしばり、話題はアール・デコ博と閉会後のアール・デコの建築とします。後半はアール・デコの解釈を振り返るとともに視野を広げて、さまざまな国々の状況をお話したいと考えております。

アール・デコ博の目的

最初に、1925 年のアール・デコ博がどのように開催されたのかご説明いたします。

パリでは 1855 年から 1900 年までに 5 回の万国博覧会が開催されました。通常の万博と異なる「装飾美術の博覧会」の開催はそれなりの準備と決断が必要であったと推察されます。1900 年パリ万博開催当時、フランスは装飾美術の面で他国に劣り、通商産業省等が調査を開始して、1906 年の下院議会で博覧会の開催と装飾美術の必要性が説かれます。

その後、装飾美術の関連 7 団体がアール・デコ博につながる博覧会に関する検討に入り、「シャプサル・レポート」などの報告書が作成されました。これらの報告書の指摘事項は、次の 4 点に大別されます。

1 つ目は「純粋美術」と「応用美術」の課題です。本日はわかりやすく、純粋美術を建築、絵画、彫刻、それ以外の美術、応用美術を装飾美術に置き換えてお話ししますと、これら両者の序列や境界を撤廃し、融合させることが推進されました。アール・ヌーヴォーもこの境界を越える試みと理解されていますが、国がそれを推進した点が両者の相違で、こうした融合は装飾美術の地位向上に不可欠なことでした。

2 つ目は、美術品、工芸品、機械製品、これらすべてのモノに幅広く美意識を持つという考え方です。装飾美術に分類される芸術分野の拡大ばかりでなく、さらには機械生産による製品まで視野に入れられていました。

3 つ目は、すべての人々が身分や階級の区別なく、美術の利益を享受できるというヒトに焦点を当てたものです。そしてモノとヒトの拡大で、新たな産業の発展と国家の繁栄が提案されたのです。

4 つ目は、「フランス的近代化」による複製品、「良き趣味」の下で蔓延した過去の様式を懐古する模造品からの脱却です。アール・デコ博は、過去の芸術や様式を否定しましたが、否定したものは博覧会規則の通り、模造、模倣、偽作品でした。ここが過去の芸術や様式を完全に否定したアール・ヌーヴォーと大きく異なる点です。

アール・デコの作品がアール・ヌーヴォーをはじめ、キュビズム、未来派、アメリカ・インディアン、マヤなど、時代や地域の異なる過去の芸術様式を用いて説明されることがよくあります。こうした点は、過去の様式に基づく創造性と独創性のある作品を受け入れたことによるものであるかもしれません。

アール・デコ博の会場と展示館

本博覧会の主な会場は、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドとクール＝ラ＝レーヌで、フランスの展示館と諸外国の展示館がセヌ川を挟み向かい合うように配置されました。

これらのフランスの展示館は、平面が八角形、もしくは角を切り落とした形(隅切り)で、さらに立面も主に軒高 5m より上部が 45 度の斜線規制で切り落とされています。こうした外形の統一は、さまざまな形態の外国館とは大きく異なりました。

建築には「全体と部分」に関する議論があります。こうした観点からフランスの展示館を見直すと、全体の造形が制限を受けたことによって、建築家による検討の視点が部分の造形に傾倒したのではないかと考えられます。アール・デコ博では、主題は建築本体ではなく装飾美術でした。これは本博覧会の開催趣旨であり、その後のアール・デコの建築造形にも大きな影響を与えたと捉えることができるでしょう。

フランスのアール・デコ建築

こうした点を踏まえて、フランスでどのようなアール・デコの建築が建設されたのか、を見ていきます。

アール・デコの建築が、フランスで興隆したのはアール・デコ博の閉会后です。たとえばコート・ダ・ジュールのホテルや別荘、ニースの市民のための住宅、カンヌの大型ホテルなどが建設されました。バスク地方やダクスも同様に、市長がアール・デコに熱狂した結果、アール・デコのカジノやホテルが完成した例もあります。

またアール・デコは誰にでもわかりやすく、パリ郊外から地方都市まで、戦災復興や鉄道整備、布教活動でも大変重宝されました。図書館や駅舎の整備にアール・デコの建築が採用されています。また第一次大戦後、反強権主義による民衆の離反や、コルニユデ法（フランス初の都市計画法）による郊外の開発で、こうした教会堂が整備されました。

20 世紀初頭における「アール・デコ」の概念

では次に「アール・デコ」という言葉がどのような形で使われてきたのか、お示しします。同時代の芸術運動を少しおさらいすると、イタリアの未来派、ロシアの構成主義、オランダのデ・スティールなど、たくさんの運動がありました。これらの共通点は、ある特定の建築家や画家らが明確な思想や理念、主義主張を持っていたことです。ところがアール・デコには特定の建築家や画家らがいませんし、宣言や提唱、主義主張も皆無です。こうした点を踏まえると、アール・デコは同時代の芸術運動と異なる存在であると捉えることができます。

そもそも「アール・デコ」という言葉は、「装飾美術」を意味するフランス語を略して英語、そしてカタカナにしたものです。20 世紀前半当時にこうした言葉が使用されていたか、調べると、オテル「アール・デコ」という例が見つかりますが、この言葉は今、我々が用いている「アール・デコ」とは意味が異なります。

では、アール・デコ博の閉会后、こうした新しい芸術は何と呼ばれていたのか、見返してみると、「1910 年様式」「20 年様式」「25 年様式」「30 年様式」のように、年代毎に区切って示されていました。（「25 年」というのはアール・デコ博の開催年です。）ここで話が少し、建築に偏りますが、当時近代建築を主導したモダニズムの建築家は、その後にアール・デコと称される新たな建築、商業主義の建築を、表面の装飾に新たなモチーフを自由に取り入れただけと軽蔑し、「ジャズ・モダン」や「モダニスティック」という言葉を用いました。

20 世紀中盤以降における「アール・デコ」の評価

では「アール・デコ」という言葉はどのように誕生したのか。これは 3 人の美術史家ヴェロネージ、ヒリアー、ブリュナメールが 1966～68 年の著作の題目に「アール・デコ」という言葉を用いたことに端を発すると考えられています。

とは言え、建築に限れば、ヴェロネージ、ヒリアーの著作にも、アール・デコ博やアール・デコに対して否定的な意見があります。先ほどモダニズムの建築家がこうした建築を否定したことをお話しましたが、ヴェロネージらも同じ立場でした。ブリュナメールによるパリ装飾美術館の展覧会カタログにも、これはアール・デコの建築である、というような明確な指摘はほぼありません。

また、これら三者による著作と同時代に、モダニズム建築を否定する建築家が登場します。つまりモダニズム批判と時を同じくして、アール・デコの建築は批判されながらも世に取り上げられ始めたのではないかと、ということです。

こうした点を踏まえると、アール・デコの明確な定義は未だ難しく、アール・ヌーヴォーに由来することと、戦間期に興隆を迎えたというこれら 2 つの大きな枠組みが、この新たな芸術を指摘する共通の基準として定着し始めたのではないかと、ということです。主に 2000 年以降の各国の著作などを見ると、大方同じ指摘が記されています。

世界各地のアール・デコ建築

アール・デコの建築は現在さまざまな地域で指摘されています。著作、論文、報告書が発行された国を確認すると、アール・デコは全大陸に及んでいるのではないかと、ということが徐々にわかってきました。すなわちヴェロネージらがいくつかの例を示したアール・デコの建築を頼りに、同様の捉え方ができる建築が全大陸で建設されたのではないかと、ということです。

ではどのような国や都市があるかというと、たとえばベルギーのブリュッセルには集合住宅や寺院などがあり、ポルトガルリスボンでは 1936～48 年の都市計画に基づく第二次大

戦後の新たな建築もアール・デコと捉えられています。

またモロッコでは1912年から各都市で都市計画が検討され、ヨーロッパ人のための新市街、大通りや広場の周辺に、ヨーロッパから輸入された新たな建築が整備されました。アール・デコは古いものや各地域のものを完全に否定したわけでないため、宗主国フランスと保護領モロッコの建築や装飾が融合した点で、これらの建築はアール・デコと評されています。こうした都市は、北アフリカに数多く点在しており、たとえばアルジェリアのアルジェや、チュニジアのチュニスが挙げられます。

インドのムンバイにも、イギリスで学んだインド人の建築家によるアール・デコの建築が数多く点在していますし、19世紀後半から20世紀前半に開発された中国、上海の疎開地、特に黄浦江の左岸にターナー・アンド・パーマーらがこうした建築を残しました。

またニュージーランドでは1931年の大地震後、ネイピアとヘイスティングズが震災復興を実施し、アール・デコの建築を採用しました。街のすべての建築がアール・デコで、みな修復によって現存しています。このほかにもアフリカ大陸のスペイン領メリリャ、エリトリアの首都アスマラ、キューバの首都ハバナ、カリブ海に浮かぶフランスの海外県グアドループ、カナダのモントリオールやトロントなどでもアール・デコの建築が指摘されています。

アール・デコの展望

アール・デコ博の開催から現在までの100年を振り返り、指摘できることは次の2点になります。

1つは、1960年代中頃から美術用語「アール・デコ」の下で、体系的な理解が始まり、その結果、芸術様式の1つとして位置付けが進んだことです。もう1つは、世界各国の研究者や愛好家によりさまざまな国や都市でアール・デコの作品の発見が非常に進んでいることです。

では最後にアール・デコの展望を少しお話ししておきたいと思います。

まず、アール・デコのさらなる体系的な理解、特に芸術分野別、国・都市別、あるいは引用源や造形別などに基づく作品総体の把握が必要で、こうした観点から数多くの都市で指摘が続いています。こうした総体を少なくとも、芸術分野毎に把握することが求められると考えています。

またアール・デコには、建築をはじめ世界各国に愛好家があります。海外では協会組織を立ち上げ、保全運動やフェスティバルなどの文化活動を展開しています。建築ばかりでなく、芸術全体を含めて保全が必要で、そのために情報交換と議論が重要な役割を担うのではないか、ということです。

そしてそういった議論が深まると、近い将来もう一度、アール・デコを再考する時が訪れるのではないかと考えております。フランスはアール・デコ博で、純粋美術と装飾美術の融合という大きな舵取りを実施しました。この転換で美術の領域とその受益者の拡大を導出し、産業の発展と国家の繁栄を試みました。こうした力学が、もし世界に広がっていた

とすれば、このような側面からもう一度、アール・デコという新たな芸術を考え直す必要が生じるのではないかということです。

アール・デコの全体像を把握するには、まだしばらく時間がかかりますが、こうした視点からもう一度捉え直して、皆様方と考えを深めたいと思っております。

(了)

美術館講座 2025 第2回「アメリカにおけるアール・デコの展開」(要約)

2025 年 7月19日 (土)

講師：江崎聡子(聖学院大学人文学部国際文化学科准教授)

皆さんこんにちは、江崎聡子と申します。本日はアメリカにおけるアール・デコについてお話ししたいと思います。

アール・デコのデザインの特徴

まずアール・デコのデザインの特徴として、基本的に次のようなものが挙げられます。

幾何学的な模様。新素材の使用。パターン化、様式化したデザイン。さまざまな美術運動や民族文化を取り入れている。それからとくにアメリカの場合、派手ともいえる色調や流線型も多用されています。

なお「アール・デコ」という言葉については、ベヴィス・ヒアリー (Bevis Hillier) というイギリスの美術史家が、1925 年にパリで開かれた現代装飾美術・産業美術国際博覧会の前後に共通したスタイルとして、60 年代から使用したのが始まりとされています。20 世紀初頭のデザイナーやアーティストが「アール・デコ」という用語を使用していたわけではありません。

そしてアメリカはフランスからアール・デコを輸入して発展させた結果、フランスとの大きな違いを生み出しました。フランスのアール・デコの多くは高価な素材を使った一点物で、手の込んだ職人技が見られる高級品です。一方アメリカのほうは大衆的。つまり一般の人々が手に取る大量生産品にアール・デコが用いられました。そのデザインの担い手は、第一次世界大戦の戦火や世界恐慌を逃れてフランスからやって来たデザイナーたち、それから後述のようなアメリカの美術館の学芸員たちでした。その点も他の国とは違うかもしれません。

アメリカのアール・デコの事例

実際にこれから何点かアメリカのアール・デコの事例を見ていただきたいと思います。これらの作品には、線対称、パターン化された模様、幾何学的な形や円形、キラキラピカピカした鏡面仕上げ、新素材の使用、セットバック、独特なフォントなどが見られます。

・ポール・フェーヘル《衝立》

・ピーター・ミュラー・ムンク《ティーポット、コーヒーポット》 等

比較としてフランスのアール・デコの作品をもってきました。これはジェラルド・サンドスやレイモン・タンプリエのデザインしたシガレット・ケースです。アメリカのものと

比べると色使いがちょっと抑えめで、すごく洗練されています。あと漆、ラッカー、卵の殻なども使ってデザインしています。一方でアメリカのアール・デコは工業製品に単純にデザインをはりつけた感じもしますよね。

建築の事例も見ていきましょう。

- ・ウィリアム・ヴァン・アレン 《クライスラー・ビル》
- ・レイモンド・フッド 《ラジオシティ・ミュージック・ホール》、《マクグローウヒル・ビル》等

それから都会だけではなく郊外や田舎のほうの州についても見てみましょう。

- ・カンザス州の連邦裁判所ビル
- ・リー・ロウリ 《ネブラスカ州庁舎のドア》
- ・ロサンゼルスウィルターン劇場
- ・フロリダ州マイアミ・ビーチ所在のホテル、ヘンリー・ホーハウザー 《セニョール・フロッグズ》 等

これらのデザインは、州のイメージである主要農産物の小麦や、アメリカ先住民族のテキスタイルパターン、亜熱帯気候に合う明るい色彩などが取り入れられています。

あとは、アール・デコの事例ともキュビスムの事例ともいえる水彩画があります。エミール・ビストラムという画家による《真珠とパーム・ビーチ》という女性像です。1920年には女性に選挙権が与えられ、都会には新しい生活様式を楽しんでいた「フラッパー」と呼ばれる女性たちもいました。これは彼女たちをモチーフにした作品で、身体の造形表現が幾何学的に処理されていますね。

それから1920年代はハリウッド映画が量産される時代でした。『Women Love Diamonds』や『Our Dancing Daughters』という映画の内部のセットでも、調度品などでアール・デコが登場します。

流線形の登場

1930年代あたりからは、流線形（ストリームライン）がアメリカのアール・デコに加えられていきます。当時の人たちは流線形に対して、空気抵抗を減らすため燃費の効率がよく合理的・科学的なデザインだというイメージをもっていました。

このオーバン社の自動車やクライスラー車のエアフロウという車種は、ボンネットからルーフにかけて流線形になっています。本当に空気抵抗を減らす効果があったかは不明ですが、このようなデザインが使用されました。それから列車のデザイン。シカゴ・バーリントン・クインシー鉄道のゼファイア号や、ヘンリー・ドレイファスがデザインした20世紀特急は、先端の部分から後ろにスーッと流れていく流線形が見られます。ちなみにライターや鉛筆削りのような本来空気抵抗とは関係ない物でも、デザインに流線型が用いられることがありました。

近代化とアール・デコ

ここからは、アメリカの文化あるいは視覚文化においてアール・デコがどういう意味をもっていたのかお話ししたいと思います。

この点について、エグモント・アレンズという有名なインダストリアルデザイナーは次のように言っています。「流線型はモダン、効率、秩序、優雅さ、清潔さ、美を意味するので、アメリカ人の想像力を魅了した」。

19世紀から20世紀にかけての西洋はモダニズムの時代でした。科学が発展して工業化し、合理的なもの、効率、秩序などが重視されます。アール・デコはそのようなモダニズムの精神や価値観を伝えるものでした。あるいはアール・デコの製品を見ると、みんながそういう「モダン」を感じとれる。アール・デコは「モダン」の「記号」だったのではないかと私は考えています。なぜなら流線型が合理的で科学的だと考えられたり、新素材を多用した幾何学的なデザインが、機械そのものを連想させたからです。

革新主義とアール・デコ

では、アメリカのアール・デコはどのように普及したのでしょうか。これはアメリカの社会制度や文化、そして歴史と深く関わっています。

アメリカ史の教科書などを見ると、アール・デコが出てきた20世紀初頭は「革新主義（プログレッシビズム）の時代だった」と書かれています。これは社会改良運動が盛んだったということです。なぜ社会改良が必要だったかという点、当時は産業の発展と工業化によって都市では、新移民の急増、貧困や治安の問題などさまざまな問題が生じ、大混乱の時代だったからです。そこでいろいろな社会福祉運動が始まります。社会全体を改良していこうという意気込みに満ちていた時代でもありました。

美術館とデザイン

そして当時、美術館のデザイン部門、とくに学芸員の方たちにとって、デザインは社会改良の手段の一つでした。つまり一般の人々が美術館でいろいろな美術を勉強することでアメリカの教養水準が上がるので、美術館も社会改良運動に参加し、貢献しているのだという意識があったのです。

そこで今日は、アメリカの美術館がアール・デコやインダストリアルデザインを普及させた一例として、メトロポリタン美術館をご紹介します。

このメトロポリタン美術館ですが、アメリカの人に美術と美術教育をもたらすことが設立の趣旨でした。アメリカはヨーロッパに比べ歴史が浅く、文化や芸術がない国というイメージが、19世紀あるいは20世紀初頭になってもあったので、アメリカ人の知的水準や美術の趣味を向上させるために美術館が創設されたのです。

ちなみにアメリカでは100年以上前から美術館講座がたくさんありました。最初は教養のあるエリート向けだったのですが、メトロポリタン美術館は世紀転換期に方針を転換

し、より一般の市民に開かれた美術館になるために日曜日開館を開始したり、無料のインダストリアルデザイン講座を開設し、さらに美術学校を開校しました。そして美術館のデザイン教育では基本的に、学芸員がヨーロッパで買い付けた物、つまりヨーロッパのデザインをお手本にしていました。アール・デコの普及についても、学芸員がフランスからたくさん実物を買ってきて、それをアメリカのデザイナーたちが勉強したことで広まったという経緯があるのです。

パリでの万博とアメリカ

1925年にパリで現代装飾美術・産業美術国際博覧会という万博が開催されました。この万博には22カ国が参加したのですが、アメリカは「この万博の水準に達しているものがない」という理由で参加しませんでした。しかしメトロポリタン美術館の学芸員たちは、何人かで視察しに行ったようです。結果、彼らがモダンなデザインだと思うものがセレクトされ、それらが後に巡回展のような形でボストンやニューヨークなどの都市部で展示されました。ということはアメリカのアール・デコの発展には、学芸員たちの審美眼がフィルターとして大きな役割を果たしたということになりますね。

またメトロポリタン美術館の学芸員たちは、ビジネス界とも密接な関係がありました。たとえばデパートのバイヤーに、アール・デコとはこういうデザインで、是非買い付けるといいよなど、具体的にアドバイスをしていたみたいです。

そして25年の万博から4年。とうとうメトロポリタン美術館で「建築家と工業芸術展」を開催する運びになりました。そこでは当時モダンなデザインと考えられている、つまり今でいうアメリカのアール・デコのデザインのインテリア製品などが数多く展示されたそうです。

アール・デコの普及とアメリカの大衆消費社会

ではこの時代のアメリカにおいてアール・デコは何を意味していたのでしょうか。それはアメリカの大衆消費社会と深く関連します。この時代のアメリカの大衆消費社会は当時のヨーロッパに比べると画期的なものでした。貴族など限定的な階級の人々だけでなく、普通の人々（労働者階級や女性）も、お金さえあればいろいろなデザインの製品を買えるという社会です。

そしてその結果商品の購買者ターゲットも広がっていき、企業はさまざまな人々にアピールする製品を作ることが必要になりました。その際に、デザインが広告と同じような役割を果たしたのです。機能が同じような製品のなかから自社製品を選んでもらうために、何らかの価値をあらわす記号として、デザインが重要な役割を果たしたのです。つまりビジネスとデザインが密接な関係にあったといえますね。

このビジネスとデザインの関係を示す具体的な事例と私が考えているのが、1939年のニューヨーク万博です。「World of Tomorrow（明日の世界展）」という名前が付けられ、

1939～40 年にニューヨークのクイーンズ地区で開催されました。

実はこの展覧会、現代の万博の雛形を作ったと言われています。それは企業主体だったからです。万博は 19 世紀の半ばからロンドンで始まり、最初は国や政府が中心になり運営されました。時代を経て、20 世紀になり、1939 年のニューヨーク万博は、企業が中心となって構想され、パビリオンが作られ、各企業の製品において最先端の技術が紹介されました。ニューヨーク万博は大衆消費社会を明確に可視化する場であったと言われています。

さらにこの万博は、当時のヨーロッパに台頭しつつあったファシズム、ナチズムへの抵抗でもありました。階級に関係なく誰もが物を買える、つまり消費を通じて民主主義を体感できるアメリカは素晴らしい国で、そこには明るい未来が訪れるのだというメッセージがその根底にはありました。

そしてこの会場全体で用いられたのがアール・デコでした。たとえば自動車のジェネラル・モーターズ、万年筆のシェーファー社、アメリカン・タバコなどのパビリオンでアール・デコが見られました。マックス・フライシャーというアニメーション会社が制作した万博の宣伝アニメもあり、そこにはアール・デコの未来都市が登場します。そしてこの万博のデザイン部門の統括をしたウォルター・ドーウィン・ティーグはこう述べています。

「一般の人々の趣味を理解し、大衆的な言語で語ることがインダストリアルデザイナーの前提だ」。デザインとビジネスの密接な関係が窺える言葉ですね。

おわりに

アメリカのアール・デコは、本日まで紹介したようにアメリカ特有の社会的、経済的、文化的要因などによって広くアメリカ社会に普及していきました。その結果、ヨーロッパとは違う形で独自の発展を遂げ、1920～30 年代のアメリカを代表するデザイン様式になったのです。

(了)